

フアイト

大久保中学校 三年 片山 藍

この本を読み終えたとき、私は自身の昨年のことを思い出した。そして、「現在」「未来」のことを考えるようになった。

ある夏の夜、突然家業の五代目店主候補だった夏希の兄が消えた。青天の霹靂。時を経て秋、彼女の人生が動き始めた。昨年の秋、私の人生も動き始めた。

生徒会長の選挙で私は当選しなかった。一年生の頃からずっと生徒会で活動してきたのに。人のために何かすることが大好きで、この仕事に誇りを持っていた。そして、生徒会長になってみんなで協力して、学校全体を盛り上げたいと思った。選挙当日、私は自信を持って演説に挑み、自分の最大限の力を出し切った。そう感じた。しかし、結果は落選。すごく悔しかった。私は正々堂々戦ったのに。その日はたくさん泣いた。目も腫れた。生徒会のことはもう考えないようにしようとした。夏希も突然出ていった兄のことを恨んでいたし、考えないようにしていた。けれど、頭はどこかには兄がいた。自分が嫌だっただろう。モヤモヤした気持ちをずっと抱えることになるから。そうしている内にこれから先、生徒会よりもっと私の心を動かすようなものに

出会えるのだろうか、と考えるようになった。不安な日々だったが、何もしないのも自分らしくないと思い、三年生になり学級委員に挑戦した。それは、人のために何かしたいという私の思いにぴったりな仕事だった。夏希が伝統を残しつつ更により良い靴を作れると思ったように、私も生徒会役員ではなくても誰かの役に立てると気が付いた。

私は、この本の最大の魅力である靴を作ることに対して、決して妥協しないおじいちゃんと夏希が大好きだ。その上、家族全員が妥協しない。美しい環境。例えば、チュール一つ決めるにしても色味や素材感にこだわっていた。その時の

「あら、それじゃ夏希が言ってた、似てるけどちがうものを近い場所でコーディネートするとダサイ、ってことにならない？」

という夏希のお母さんの言葉に感銘を受けた。私も、生徒会選挙が終わってからは妥協せず、に全てにおいて一生懸命取り組み組もうと思った。勉強、学級委員の仕事には全力で取り組みだ。修学旅行では平和、学年レク、運営の三つのプロジェクトを掛け持ちした。修学旅行の報告会では、パワーポイントを使ってプレゼンテーションを行った。視覚情報を用いて、聞いている人に興味を持ってもらえるよう工夫

した。妥協せずに全身全霊でやり遂げた。夏期講習へも行き、着々と将来への準備を進めている。

ふと、もしあの選挙で当選していたらと考えることがある。こんなにも勉強していたか。たくさんさんのプロジェクトに参加していたか。夏期講習へ行くことができていたか。何より、あの悔しい過去を経験せずに真つ当な人生を歩めていたか。きつとひねくれた考えのままの人生だっただろう。人の大切さを知らなかっただろう。私は要領が悪いので生徒会長の仕事をして、色々なことにも挑戦していたら頭がパンクして学校どころではなかったかもしれない。

私は選挙が終わってからたくさんの人の言葉に救われた。支えられた。心が暖かくなった。その中でも、先生が紹介してくれたある女性歌手の歌の歌詞に勇気をもらった。

「フアイト！ 闘う君の唄を
闘わない奴等が笑うだろう
フアイト！ 冷たい水の中を
ふるえながらのぼってゆけ」

授業中にも関わらず、涙が止まらなかった。夏希も花嫁に

「夏希ちゃん。ありがとう！あなたとマエストロは私の命の恩人よ！」

という言葉をもらい、心が暖かくなったと思う。

兄がいなくなったことによるプレッシャー、見習いというライバル、進みたい道への挑戦。常に前を向いていた夏希だからこそ、未来への第一歩が踏み出せたのだと思う。私にも踏み出した一歩があったと確信している。中学校生活で、価値あるものをたくさん得たから。先のことは分からないけど、何事にも前を向いて挑戦し続ける。夏希が新しい靴を作ろうとしているように。大きな出来事やささいなきっかけで、未来が良い方向にも悪い方向にも変わる。そのときに、声をかけてくれる人や寄り添ってくれる人を大切にしたい。これから先も、きっと今回のような経験をするところがあるだろう。それでも私は、少しずつでも前に進んで行く。

「ひと」として生きる

樟風中学校 二年 西元 梨紗

「一人でがんばることも大事。でも頼っていいと言ってる人に頼るのも大事。」この言葉は主人公に向けられたものですが、私にとっても人間のあたたがさや、「ひと」としてどうあるべきかということを考えさせるものとなりました。

この物語は、二十歳という若さで両親を亡くし、たった独りになった柏木聖輔の一年が書かれています。ある日、砂町銀座商店街の惣菜屋で、最後に残った五十円のロッケを見知らぬお婆さんに譲ったことから、

不思議な縁が生まれていきます。「縁」というものは、ささいな出来事からつながるもの。そんなたくさんの「縁」のおかげで、今の私も成立しています。

私はこの本を読んでいく上で、登場人物一人一人の名前が大切にされているなと思いました。例えば、聖輔が自己紹介をしている箇所では、「柏餅の柏に木に聖徳太子の聖に車偏の輔で柏木聖輔です。」と言っています。他の登場人物も、主人公がその人と初めて出会った時はカタカナで記されていて、その後詳しく漢字で説明されています。それは、この本にでてくる人の物語を誰一人おろそかに

しない姿勢なのだと感じました。私の名前も、「豊かな才能や感性を持ち、多くの人に優しさを与えることができる人になってほしい。」という由来があります。それは、両親がつけてくれた大切なものであり、私という人物をおろそかにしてはいけないと思われるものです。

柏木聖輔は、早くに両親を亡くし「独り」だったけど、とてもあたたかい人たちに出会っていきます。惣菜屋の田野倉督次さんは、ロッケを譲ってしまった聖輔にメンチカツを安くしてくれたり、お店で働かせてくれたりしました。そして他にも、孤独や将来への不安を抱えている聖輔に、「何もかもあきらめなくても、いいんじゃない。」と声をかけてくれる人がいたり、「頼っていいと言ってる人に頼るのも大事。」と教えてくれる人もいました。聖輔は一人になって、人に頼むこともできず、自分のやりたいことをあきらめてしまっていました。でも、こうして声をかけてくれる人がいるということは、本当の孤独ではなかったんだと思います。私も、一年生の時、休み時間に話す人がいなくて、一人漢字練習をしながら孤独を感じていた時がありました。他にも、授業でグループを作る時に、みんなの輪の中に入れるかなと、不安に

感じていた時がありました。でも思い返せば、一人でいる私に話しかけてくれる友達がいたり、悩んでいる私に、「相談に乗るから何でも言つて」と言ってくれる先生がいました。きつとこれも、本当の孤独ではなかったんだと思います。

聖輔は自分の周囲にいてくれる人を思いやり、大事にしていました。日頃の私も聖輔のように、自分を心配してくれる人や、気にかけてくれる人を当たり前のことではなく、有難く、大事に思っているかを考えさせられました。例えば、私の母はいつも私の話を聞いてくれたり、喜怒哀楽を共にしてくれます。それをずっと当たり前だと思っていましたが、有難く思わなければならないと思いました。

また、ある日聖輔は、学生時代の同級生の井崎青葉という女性に再会し、何でも話せて自分に向かせてくれる大切な存在ができました。私にもいつかそんな存在ができたらいいなと思いました。

私はこの本を読むまで、「孤独」とは不幸で悲しいことだと思っていました。自分が孤独だと思ったこともありましたが、でもこの本を読んで、案外「孤独な人」はいない気がしました。皆どこかで誰かに声をかけられ、支えられているからです。それでも孤独だと感

じることがあります。でもそうだから人間の
あたたかさを感じるができます。私の
「孤独」の概念が変わった気がしました。

主人公の聖輔は「ひと」との出会いの中で
大切な存在もでき、変わっていきました。私
もこれからもっとたくさんの人に会います。
その出会いを大切にし、人に寄りそえるよう
な人になりたいです。

この本の最後に、「大切なものじゃない。
形ない何かでもない。人だ。人材に変わ
りはいても、人に代わりはいない。」と書か
れています。人材の代わりはたくさんいるし、
AIにもできます。でも人の代わりは、AI
にも誰にもできません。私も含めて人は皆、
唯一無二の存在なのです。だからこそ、自分
という一人の「ひと」を大切にし、周りにい
る「ひと」も大切にしていかなければならな
いと思いました。